

進みつつある大学統合化

副会長 奥野武俊(大学17期)

我々が、「船舶工学科」という看板を下ろして「海洋システム工学科」にしたのは、1993年であった。あの頃は文部省が大学に対する厳しい規制を緩和して、全国の大学が独自の改革が出来やすいように促した時であり、大阪府立大学工学部はそれまで10学科であったものを13学科に改編し、海洋システム工学科もスタートさせたのである。あれから10年になろうとしているが、この間に、「造船／船舶」という名前を学科名として表に出している大学はほとんど無くなってしまった。そして今、もう一度我々は“改革”の時に立たされている。

今度の改革は、すでにマスコミで報道されている通り、工学部や海洋システム工学科だけの問題ではなく大学全体の組織やありかたに関わるものである。すなわち大阪府立大学、大阪女子大、大阪看護大学が統合化されて一つとなり、法人化されることになる。その中で最も大きな改革は、学部生の基礎教育を担当するための総合教育研究機構を作ることになり、大学院を中心とした研究型大学を推進するところにあることが強調されている。

実は、工学部は10年前から前述のような改革を進め、すでに大学院を中心とする組織に変更してきたことから、今回の大学改革にはそれほど大きな変化は求められないものと考えていた。ところが最近になって大学の設置者である大阪府から、大学教員の定数を30%減ずる計画が出されて組織のスリム化が求められ、工学部もこの時期に合わせた改編が進められることになったのである。

現在進行している計画では、大学院工学研究科は、機械系

専攻、航空宇宙海洋系専攻、電子・数物系専攻、電気・情報系専攻、物質・化学系専攻の5専攻になり、海洋は航空と同じ専攻になる。ただ、学部は機械工学科(学生定員70名)、航空宇宙工学科(同35名)、海洋システム工学科(同25名)、数理工学科(同25名)、電子物理工学科(同45名)、電気通信情報工学科(同45名)情報工学科(同45名)、応用化学科(同65名)、化学工学科(同35名)、マテリアル工学科(45名)の10学科になることが予定されており、従来と異なるのは、機械システム工学科がエネルギー機械工学科と一つになって機械工学科に、機能物質科学科は、応用化学科とマテリアル工学科に併合され、経営工学科は情報や電気系の学科と一緒にすること、定員が見直されたことなどである。

海洋システム工学科では学生定員が25名に減る事になり、教員スタッフは今より2名少なくなる。ただ、これから文部省との協議があって新しい大学の設置が審査され、一方では、大阪府議会において法人化のための法整備や具体案の審議が行われる予定で、詳細な大学改革の計画が最終的に正式決定されるのは、もう少し先になる。それまでは、どこでどの程度の計画変更が強いられるか分からない・・・という緊張状態がしばらく続くことになる。

人間は昔から、自分の置かれている場をなんとか守ろうとしてきたように思われる。特別なことがなければいつも保守的で、変化を望まない・・・のであろうか？ その一方で、変化が生じた時にそれに対応できる適応能力はかなり高いことも事実のように思われる。これは何を意味するのであろうか？ 結局、

何らかのキッカケによって変化が強いられ、それに対処してきたと考えていいのかもしれない。そのキッカケは、人間の内部から起こるものと、外からくるものの2面性があり、それによって人間は文化を形成してきた・・・というのは文化人類学者の説である。たとえ原因がどちらであっても、現状を把握し、将来を考えて、新しい局面にチャレンジすることが必要なのである。その時、ビジョンを持つことができれば幸いである。夢が無ければ、ただ変化に流されるだけの可能性が高くなる。しかしながら、これは簡単なことではない。いつの時代でもはっきりとしたビジョンが示されたわけではなかった。それは歴史

が物語っている。

いま我々にできることは、小さなことかもしれない、非常に局所的な答えしか出すことができないかもしれない。また、場合によっては、大きな流れに飛び込む勇気と、たとえ流されているように見えても構わないとの覚悟も必要であろう。また、たとえ無力に思えても流れに逆らうことが必要かもしれない。誰も最適解はわからないまま進まなければならないはずである。その結果の評価は、後になって、歴史だけが出すことになる。それを心に留めておくなら、謙虚な心で最善を尽くすことができるであろう。それしかない……。

谷本喜一様 勲三等旭日中綬章受章に寄せて

造船学科建学 60 年に当り

藏野 楠雄(造船 1 期)

茫々たる歴史の星霜と人生の歳月を想起するとき、我らが心の裡に鮮烈にきらめくもの、それは彼の百舌鳥原頭に合い集ひ交に友と呼びかはし、君の愁ひに我は泣き、我が喜びに君は舞い共に過せし三春秋の月日である。この遠き月日は夢にあらず、我等の中に今尚生きてあり、旧友相集ひて語るとき沸々として湧き上る血流の脈動を感じるのである。

げにこの時空を超えた青春の響きを我らが生命の炬を燃やし続け、傘寿を迎え晩節を全うしたいものである。

大阪高等工業学校 至誠寮 逍遙歌

見よ金剛の雲晴れて 大氣の鼓動打つ処
朝風吹けば青春の 若き心は躍るかな
あゝ日は彼方淡路なる 島のほとりに 落つとき
百舌鳥の青野の夕風に 若き心は嘆くかな

①藏野

平成 14 年 11 月 26 日

老顔の造船 1 期, 明石大橋を望む 舞子ビラに集う

あれは、2001年の4月ごろだったか、定年まであと4年なので、ここらでゆっくりと学究生活に戻って(というのは、それまで工学部で大学院委員というのを2期4年間やっていて、雑務で結構忙しく、その任期を全うして役を降りたところだったのだ)、好きな論文でも読んで、研究の真似事もやって、論文の一つも自分の手で書いてみたいものだ、ひそかに自らの余力に期待しながら過ごしていた頃だった。

その頃のある日、機能物質科学科の南努教授が部屋を訪ねてこられた。彼は直前の学長選挙で01年7月から次期学長に選ばれていたのだった。彼とは若い頃職員寮の大野芝宅舎で一緒だったし、彼が工学部長のとき大学院部局化で共に苦労したこともあり、いわば旧知の仲なので、今回の学長選挙での当選を自分としては喜ばしく思っていた。

「姫野先生、実は総合情報センター所長のI先生の病気が思わしくなくて、ご本人から辞任願いが出ている。そのあとを引き継いでくれませんか？」

「南さん、あのねー。僕は定年までの期間をゆっくり過ごしたいんや。これまで大学のためには十分仕事してきたやろ。もう勘弁してくれ。そっとしといてくれよ。」

「姫野先生、あのね、」理由をいくつか挙げたあと、

「答えはこれしかない！お願いする。」

「いやや！帰って頂戴！」

その後、何回か来られて「これしかない」の一点張りについてはめられて、総合情報センター所長をお引き受けすることになった。

「姫野先生、実はもう一つあるんや」

「ええーっ！何やのん？」

「学長の執行体制を強固にするために学長補佐制度を作りたいんや。その総括補佐をやってくれませんか？」

「ええーっ！何やのん、それ？」

「答えは、これしかない。お願いする。」

「ええーっ！」

結局、01年7月1日に南学長が就任後、僕は7月半ばに総情センター長に就任した。学内の部局長との顔つなぎやセンター内部の仕事の「レクチャー」を受けた後、夏休み返上で学長補佐体制の立案作業をやって、10月評議会での承認後、「総括学長補佐」の学長辞令を受けた。

平時なら、これらの役は大変名誉なことであり、定年前の教授として安泰にこれらの役をそつなくこなして行けば良いのであろうが、時は有事も有事、大阪府の大学にとって大変革のときであった。

前年から始まった設置者主管の「府大学あり方検討会議」において、大阪府の設置する大阪府立大学、大阪女子大学、大阪府立看護大学の3大学に対して、大学改革が厳しく迫られていたし、大学自らも改革の真っ只中にあっただ。改革の方向は、府大学全体として1法人1大学に統合、研究型大学として再編、学部の教養教育も重視、であったが、設置者としては財政逼迫の事態を受けて人員削減が最優先課題でもあった。

これらに関する企画・立案・調整の役が8名の学長補佐(内、総括学長補佐2名を含む)の任務であった。中身は統合・再編・法人化に関する基本から泥臭い話まで、大学間・学部間の調整、文部科学省や公立大学協会との折衝等々多種多様な課題が次々と沸いてきて、毎月2回学長室に集まって方針を議論するだけでなく、その間各種の連絡・調整作業が絶え間なく続くわけである。大学改革の中身の話はここでは触れず、小生の最近の気持ちを述べることにしたい。

南学長は、大学改革の先頭に立って対府折衝や他大学との交渉に当たって居られるわけだが、学長補佐という取り巻きたちが色々と発する意見が、大学の執行権限者としての学長の意思形成に結構役には立ってきたのかなと思っている。

02年6月1日、副学長という職が設置者に認められて、小生を含む3名が発令された。教育担当副学長は学生部長兼務、構造改革担当は総合科学部長、研究・産学連携・広報担当の小生が総務センター長兼務である。要するに、管理職としての手当ては変わらない。外向きに使える副学長という役職名が認知されただけで、仕事の中身は学長補佐である。そうそう、名刺を100枚だけ校費で作ってくれたんだ。

名刺を家内に見せたら、「あなた大丈夫？」と心配してくれた。そうだよなあ！いわゆる副学長職など、この俺に務まる訳ない。出来ることといえば、学長の秘書役としてあちこちと事前の折衝をすることぐらいだもんなあ。

学長補佐として南学長と付き合い、僕との違いに気づくことが多い。彼は化学の世界では一流の国際級研究者である。何しろ若いとき電気を通すガラスを作ったのだ。プラスチックに電気を通した白川先生が01年にノーベル賞をもらったほどだから、彼もノーベル賞級だと思ってる。一方こちらは、造船という狭い社会で設計に対する支援研究をやってきただけのいわば技術屋である。

また、南さんは化学屋だけあって、直感力が優れていて、問題に対して常に具体的な解答を模索し、用意する。そして、その解答が後から考えても的を射ているのが立派なところである。彼の口癖の「これしかない！」は、そのような彼の対処法の現われでもある。一方、僕のほうは、具体策よりも、全体像や、マクロ・理念・方向性、シンセシスなどのむしろ戦略的観点や論理的思考を好む。

その二人が会話するとしばしば次のような珍問答になる。

「うーん、やっぱりこれやな。これしかないなあ。」

「ちょ、ちょっと待って。ちょっと別の観点からも考えようや。」

「うーん、でも、これしかないな。」

「上から網をかぶせたら、どうなるかなあ。」

「やっぱり、これしかないな。」

「これを突き進んでいくと、こんな問題がでてくるなあ。」

「うん、でもやっぱり、これやな。」

物事を実現するには、戦略と具体策の両方がセットで必要なのである、という教訓話になってしまった。しかし、ことはそんなに簡単ではない。学長は毎日のように、様々な問題について意思決定を行っているのだが、その問題は、大抵の場合、制約付き多目的最適化問題のパレート解のひとつを選択するという行為といつてよからう。困るのはその設計要件が日々変化することである。

「この観点X(学内重視)からすると、答えはAやし、Yの点(対外部)からするとBやし、Zの面(財政)から考えるとCやしなあ。うーん、困った。」

次の日「なに、文科省の方針が変わったか。うーん、そうすると、観点V(人材面)が重要な、それならDで行こうかな、、、やっぱり、Dやな。これしかないな！」

このような、現実と直面する意思決定の行為は、理論に当てはめて合理的に解決できるようなレベルではないのだが、学長を補佐する立場の小生としては、意思決定問題は複雑な問題を整理する道具として、大変役に立っていることは事実である。

以上が、小生の近況と雑感であるが、本稿は、海洋システム工学科の同窓会誌に書いたものであり、万が一、南学長の目に触れたとしたら、まったく以って申し訳ない。小生の偏見と作り話をお詫びする次第である。

お知らせ

平成14年度同窓会費を払い込んでくださった方で、ご依頼人名が白紙の方がおられました。

お心当たりの方には2重に請求書が同封されていると思われるので、賜朋会事務局までご一報下さい。

取扱年月日：平成14年6月17日(払込金額：2,000円)

取扱郵便局：虎ノ門

ユニバーサル造船設立

牧野 功治(大学41期)

平成14年10月、各企業から造船部門が相次いで分社し、3つの造船専門会社が誕生しました。すでにご存知の方がほとんどだと思いますが、川崎重工業(株)からは(株)川崎造船が分社独立し、また石川島播磨重工業(株)からは船舶海洋事業部が分離、住友重機械工業(株)との合弁会社マリンユナイテッドを継承し、(株)アイ・エイチ・アイ マリンユナイテッド(IHIMU)として生まれ変わりました。そして、NKKと私の勤務しておりました日立造船(株)はそれぞれ造船部門を分離・統合し、ユニバーサル造船(株)となりました。ちなみに、NKK本体は平成14年9月に川崎製鉄(株)とJFEホールディングスを設立、日立造船本体は平成14年10月よりHitz日立造船(株)となっています(将来的にはHitzとなる予定)。

社内報の記事を借り、簡単に会社概要についてお知らせしますと、「ユニバーサル造船」の社名は、21世紀に新たに誕生した造船会社として、全世界の顧客に広く(UNIVERSAL)愛されることを願い、独創的で特徴のある(UNIQUE)船舶を創造し、NKKと日立造船の強い結びつき(UNITED)を力として世界に飛躍したいという願いを込めて名付けられています。

また、シンボルマーク(図を参照)は、Universalの頭文字「U」がモチーフとなっています。Uの形は船底のシルエットをイメージし、Uの左側にある12本の線は、7つの海と5つの大陸を表しています。また、Uを取り巻く円は地球(世界)を表しています。

本社は東京の大井町、また、舞鶴、京浜(NKK 鶴見工場とHZ 神奈川工場が統合)、因島、有明、津に各事業所、それから技術研究所が津(生産技術関係は有明)にあります。その他お問い合わせ、詳細については下記ホームページを御覧頂ければ幸いです。(少し宣伝が過ぎましたか)

さて、ここからは私個人の近況についても少しだけ触れたいと思います。統合に伴い、私の生活環境も一変しました。今までは大阪市大正区にある技術研究所に勤務しておりましたが、統合後の技術研究所は津に設立されましたので、住み慣れた奈良県から三重県に移ることになりました(実家から寮で一人暮らしというおまけつき)。こちらでは自動車通勤なので、急遽自動車(中古車)を購入。たまの休日に家の車を運転する程度の半ペーパードライバーだったので、今もまだ危なっかしい運転をしながらなんとか通勤しています。

入社当時は、まさか自分の勤務する会社が統合するとは予想だにしませんでしたが、入社8年目でマンネリ化しかけていた生活を一新するにはちょうどいい機会であったと思います。現在は早く新しい環境に慣れ、立派な三重県民になるべく努力している次第です。

ユニバーサル造船株式会社

本社 東京都品川区大井一丁目28番1号

TEL: (03) 5742-4050

URL: www.u-zosen.co.jp





Necessity is the motive of behavior.

加藤 幸男(大学 42 期)

「必要は発明の母」というが、この「必要」というのは発明だけでなく、色々な物事の原動力になっている気がする。「必要に迫られて…」という言い方はしょっちゅう聞く言葉だが、何事においても「必要に迫られる」というのは、何らかの行動を起こす際の重要な要素だ。特に「新しい知識を導入する」ということにおいては如実だと思う。

身近な例では「今まで家事なんて全然やったことなかったけど、一人暮らしを始めて【必要に迫られて】料理を覚えた」とか、「職場で新しいコンピュータソフトを使ったシステムが採用になったので今までさわった事のないパソコンを【必要に迫られて】使うようになった」とかいうシーンは日常茶飯事だろう。

しかし、「何事かを習得する」という意味においてこの「必要に迫られる」といのは絶大な力を発揮すると思うのは私だけだろうか。

で、この「必要に迫られる」というやつはしばしば「切羽詰った」状況を伴うことが多い。「必要に迫られ」なおかつ「切羽詰った」状況。この時、人はもの凄い集中力を発揮する。

私は役者だ。比喻ではなくて文字通り本職が「舞台俳優」である。しかもミュージカルの舞台を中心に活動しているのでダンサーでもあり、歌手でもある。日々覚えることは山ほどある。

思えば、大学を卒業して一度は船舶の設計会社に就職していたが、退職して本格的にミュージカルの勉強を始めた私は「必要に迫られ」「切羽詰った」状況の連続だった。何が切羽詰ってたかって一番は「年齢」だ。ミュージカルスクールに入学した当時は26歳だった。殆どゼロからの出発だ。通常26歳ならまだまだ若いと言いたい所だが、プロのミュージカル俳優になるために一から始めるにはかなり遅い。しかも、金持ちのボンボンで生活には困らないなんていう優雅な身分でもな

く、ろくに蓄えも無いまま何の対策も無しにいきなり会社を退職した私は文字通り無職のお先真つ暗人間だった。しかも最初は漠然と「プロのミュージカル俳優になりたい」という野望だけで、何の知識もコネも無く、プロになるための手段さえ知らないという最低の状況だった。

退職して始めの一年は暗中模索の一年だった。生活のためにバイトを転々とした。そんなある日、たまたま地下鉄のフリーペーパーに載っていたミュージカルスクールの僅か2,3行の広告を見て、スクールの入学オーディションを受けようと決心した。

今にして思えばとてつもなく無謀だったが正解だった。運が良かったのと、後は「どの道、最低なんだから行動しないで後悔するより、行動して…後のことはそれから考えよう」という【実に前向きな思考】が功を奏した。

さて、それからが「必要に迫られ」「切羽詰った」状況の究極だった。入学金と授業料で僅かな蓄えは全部パー！己の我儘で親不孝して役者修行するわけだから親を当てるわけにもいかず、入学手続きを済ませてから新しいバイトを探した。条件は「それなりに高額なバイト料で昼間の時間が(レッスンのために)空けられるもの」、となると深夜バイトしかないのだがそんな都合のいいバイトは……これがまた運良く見つかった！生活費と授業料の残金のローンとをまかないながらレッスンの日々。レッスンは当時、平日毎日11:30～16:00頃。ジャズダンス、クラシックバレエ、タップダンス、日舞、芝居、歌、パントマイムとレッスンは多岐にわたっていた。そして、バイトは広告会社の原稿打ち込みのバイトで月曜～木曜の22:00～翌朝8:00…。毎日平均2,3時間睡眠でハードなレッスンをこなし、週末寝溜めという無茶苦茶な生活だったが、なんとかや

りぬいた。しかも、その間は殆ど病気ひとつしなかった。まさに根性である。当時、「背水の陣」という言葉が常に頭の隅にあったのを覚えている。

その後もなんだかんだあって、そして現在は「劇団てん」という関西を中心に活動するプロの劇団に所属している。元劇団四季で退団後、新神戸オリエンタル劇場のプロデューサーをしていた方が主宰している劇団で、後見人というか顧問のような形で大阪府立大学の先輩である(学部は違うが…)藤本義一氏が関わっている。もっともこれは偶々で私自身が府大卒なんていうのは全然関係の無い話だ。劇団の名前は義一氏が名付けてくれたもので、「てん」は「>(カンマ)」のこと。「てん」

という音には「【天】上」「【典】雅」「【展】開」「【点】数」といった色々な意味が込められている。

プロにはなった。だがまだまだ一流のプロにはなれていない。食えるようになってきたのもつい最近だ。舞台がある限り、「必要に迫られ」「切羽詰った」状況はまだまだ続く。次から次へと新しい「必要」が現れるのだ。そして、期限(本番初日)は容赦なくやって来る。俳優は常にレッスンと勉強の日々。現役を続ける限り、一生「必要に迫られ」「切羽詰った」状況に身をさらしながらレッスンと勉強を続けるのだ。現役でいるというのはきつとそういうことを言うのだろう。

メンバーリスト KAMOME 紹介記事(2号参照)

その後

太田 裕子(元事務局)

鷗朋会の皆様 お久しぶりです。事務局を全面的に前川様に引き継いでいただいてからそろそろ1年になろうとしていますが、ますます盛りだくさんで楽しく美しい会報となった「鷗朋3号」を楽しませていただき、嬉しい気持ちでいっぱいです。編集委員の方々のご努力と会員の皆様のご協力のもと、前川様におかれては28ページという制約の中であれだけの記事を盛り込んでいく編集作業に人知れない苦労と、同時に充実感をも味わわれたのではないのでしょうか。ほんとうにお疲れ様でした。

さて、子どもがまだ小さかった頃、夫のはた迷惑な趣味につき合わされ、日頃は駅の階段さえ億劫な私ではありましたが、北アルプスの槍ヶ岳・穂高岳や南アルプスの北岳などに一家の生命の危険も顧みず毎年登っていました。そんな夫も半世紀を経てようやく学習したのか、子供たちが旅行につき合ってくれなくなったこともあって、気持ちのよい季節に新緑と紅葉を楽しむ安全で快適なお金も体力もいらない歳相応の旅をするようになった、はずでしたが…。

夫の実家が静岡にある関係でよく富士山麓までドライブを楽しみますが、麓に噴火による山火事から免れた「大室山」という山があります。この山には今もなおブナの原生林が手付かずのまま残されており、地元の人が「お父さんの木」「お母さんの木」と呼ぶ周囲数メートルにも及ぶ大木が辺りを払うように聳えています。晩秋には色づいた落ち葉が大地を覆い、訪れ

る人もまばらで、落ち葉を踏みしめながらの散策はゆったりとした時の流れを感じさせてくれます。ガイドブックにも載っていないこの辺りには地元の人か山オタクが訪れるだけで、道を誤れば青木ヶ原樹海に入り込んでしまうこともあるそうです。

今年は秋が短く11月の初めには突然真冬並みの寒波に見舞われましたが、この時に広島と島根の県境にあるやはりブナ林の広がる「比婆山」に行ってきました。例年なら標高1000mほどの登山口まで車で行けるそうですが、麓では予想もしない季節外れの積雪のため途中で車がスリップし立ち往生。雪はますます激しくなり、用意してきたチェーンも車種が変わったのをすっかり(!)していたため装着できず、タイヤは空回りするばかり。

1歳の長女をカーディフ城の城壁の上に立たせたこと、宿泊費をとことんケチって泊まったダブリンのものすごい安宿で南京虫の大群に襲われたこと、槍からの下りに台風で増水した滝谷の沢を渡るはめになったこと…等々、これまでの危ない場面の数々が脳裏に蘇ってきて怒りの炎がメラメラと燃えてきました。結局、上ってきた山道を手で雪をかきながら私が誘導しバックで戻って事なきを得ましたが、身を切る寒さにもかかわらず二人とも冷や汗でびしょりでした。

それでも雪化粧の渓谷の紅葉は確かに美しく、これからもまだ当分は油断ならない『その後』になりそうです…。

(2002年12月記)

百舌鳥八幡宮の秋祭りを訪ねて

永井 順一(元教員)

同窓会誌「鳴朋会」の名称は大学の所在地が日本書記に見られる百舌鳥[鳴]の歴史的な地名より採択されたと云われますが、その百舌鳥地方一帯の氏神として大学より西方約 2km 付近に百舌鳥八幡宮が鎮座し、特に秋の大祭は月見祭りとして古くより堺、泉州の人たちに親しまれ期間中十数万の人出で賑わいます。

本号では「まつり」に関する特集として百舌鳥八幡宮の秋祭りをご紹介します。

「ベーラ ベーラ ベラシヨッショイ」担ぎ手たちの熱気を帯びた声が一体となって広い境内にこだまするなかで次々と宮入りする八基のふとん太鼓(別に子供用ふとん太鼓八基)が旧暦八月十五日の中秋名月の日、現行の歴では今年は九月二十一日(土曜)二十二日(日曜)に行われました。

五穀豊穰祈願と満月を祝う風習が神社の祭りになったといわれ、ふとん太鼓が参加するようになったのは大正の初期からの事です。ふとん太鼓は重さ約参トン、高さ四メートル、担ぎ手は各町の青年団や壮年会の人たちで一基を運行するためには六十~七十人の人数が必要で交替員を含めると各町三百名程度の参加人数になります。

宮入は昼前より一時間の間隔で各町より順次奉納され、境内を練り歩き最終の太鼓台の宮入は午後十時頃になり、その夜は境内に泊め置き、翌日の宮出は宮入と同様にそれぞれ一時間境内を練り歩き町内に帰って行きました。

境内の天然記念物の楠の大樹の緑のもとで太鼓台の上に積み上げられた鮮やかな朱色の台座、四方に跳躍する大房、小房など、祭りの華やかさを盛り上げています。見せ場は正面の二十段の石段の昇り降りや夜間にライトアップされた太鼓

台が紙吹雪のなかで一段と華麗さを競い、太鼓の響きの勇壮さや、担ぎ手の熱気に観客を魅了させます。

祭りは全国各地で見られますが、祭礼に伴う催物(地車、屋台、神輿など)は地方により形態が異なりますが、長い年月をかけて伝承されたものが多く地域の文化として根付いています。また地域社会の人間関係の絆が失われつつある昨今、町の組織の総力をあげて行事に参加している状況を見て「祭」が地域の連帯感やコミュニケーションに多大な役割を担っていることを改めて認識させられた次第です。

なお、現在の百舌鳥八幡宮は雄大な地に整理され、環境抜群の境内に鎮座される、百舌鳥八幡宮を拝して心より感銘を受けました。

謝辞

この度は本文を紹介するにあたり、百舌鳥八幡宮・宮司 工藤俊之様より資料、写真(カラー)など、また貴重なご助言を頂戴し深く感謝の念に堪えません、誠に有り難うございました。

②祭り1

特集：祭<百舌鳥八幡宮>

③祭り2

④祭り3



ここの府大では、毎年2回の大祭、すなわち創立記念日(6月1日)頃行われる友好祭(通称ユウサイ友祭)と文化の日(11月3日)の頃行われる大学祭(白鷺祭, 通称サギサイ鷺祭)がある。さらに、7月にある七夕祭(通称バタサイ)を加えた3つの祭が、ここ数十年に亘って府大生の生態を他大学とは異なる個性的なものとしてきた。これらの行事について小生の入学当時を振り返りながら紹介させていただく。

入学式の翌日、受講ガイダンスが終わった教室に上回生がさっと入ってきて、何もわからない新生に各種委の委員を振り分けてくださる。その中でもっともコアなものが友祭委員と鷺祭委員および自治会委員である。(生協委員というさらにマニアックなものもあるが、ここでは割愛する。)各種の委員に立候補する新生などいない(そもそも何なのかわからない)から、くじで振り分けられ、17年前の小生が引いたのが友祭委員だった。(このとき、同期の河崎君は鷺祭委員を引き、5年間鷺祭を支え、今日に至って本誌に寄稿して下さることとなる。)クラブ活動以外の学生主体の主な行事は、これらの委員らによって運営されている。各種委員は確か3から4名だったかと思う。こうして配属された各種委員のうち、何名かが幹部へ育つが、ほとんどの者は1年あるいは数日でその活動を停止する。

入学直後で右も左もわからない小生は、同じくじを引いた数名とともに先輩に引かれ、“友祭”についての説明を受けた。このとき、大きな自動車で我々をレストランまで連れて行ってく

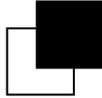
ださり、熱く語ってくださったのが、当時すでに友祭委員幹部として活躍されておられた木元先輩(37期卒・現伯方造船代表)である。そのときの『くじであれ何であれ、引き受けた以上は1年、できれば2年は委員を続けて頑張ってもらいたい』との木元氏の言葉が鮮明に思い出される。以後、小生は同期のT君を引きずり込んで1年と少しの間、友好祭のお手伝いをさせていただいた。

友好祭は、期待と失望が渦まき新入生(特に工学部)には一種の関門で、これを挟む前後で講義の出席率が大きく変化する。毎年この時期、新入生のうち何名かが消えていくように思う。初めての友好祭を乗り切ったからがホントの府大(工学部)生のスタートかもしれない。その後7月の七夕祭、秋の鷺祭を通じて1年がすぎてゆく。キャンパス内に女子学生が少なかった頃は、大祭期間中短い春が来たかのような華やきを見せた。小生の周りでもいくつかのカップルが生まれ、人生の伴侶を得たものもいる。多くの学生にとって“梅雨休み”、“秋休み”かもしれない府大の大祭は今、府立系大学の統廃合も絡んで以後どうなるかわからない状況である。多くの卒業生が様々な思い出をお持ちだと思うが、次段以降にコアな方々にその一部を紹介していただく。

⑤山田

学生生活と

大学祭



河崎 登(大学 38 期)

在学中は出来の悪い学生で留年した上にギリギリの単位で卒業して以来、採用活動で一度訪問した以外は大学から遠ざかって私に執筆依頼があったときは多少戸惑いました。しかし、このような機会は少ないと思い、また大学祭実行委員をしていたこともあり、ペンを執らせていただきました。

<大学祭>

当時の大学祭は府大生からの評判はあまり良いものでなく、“大学祭=5連休”といった印象で旅行やアルバイトなどをしてきた学生が多かったように思います。模擬店の数も20店程度という寂しいもので学生会館前に設営されたステージの周辺にあるだけで、工学部のあたりまでくと大学祭をしている雰囲気はありませんでした。筆者の推測ですが、その理由のひとつが春に行われる「友好祭」です。これは大阪女子大と看護短大(現看護大学)との合同なので女性が多いために男子学生には魅力(誘惑?)が多いのに対して、大学祭は男ばかりで比較になりません。もうひとつは体育会が公立戦を1週間後に控えていたため、盛り上がっていない大学祭に参加するぐらいなら練習する、といった雰囲気ができあがっていたように思われます。すなわち大学祭に参加する魅力がなかったのだと思います。ただ大学祭期間中に開催される生協主催の「生協祭」の1日だけは近隣住民が押し寄せ、数千~数万人の規模で賑わっていました。

そんな寂しい大学祭のなかでも、人気のあった企画を思い出すまま紹介します。まずはダンパ(ダンスパーティー)です。昼は閑散としていた学内ですが、ダンパが始まる頃になるとどこからともなく学生会館周辺に人が集まってきて

不思議に思ったものです。学生会館2F大集会室で大音量のディスコビートに多くの方が陶醉していました。次にアマチュアバンドコンサートです。学内外問わず出演申込みが多く、時間の関係上お断りせざるを得ないような状況でした。中途半端なプロよりも数段上手なバンドも多く、演奏中は人が集まってきたものでした。また「なかじまらも」氏の講演会も人気がありました。当時、朝日新聞の「明るい悩み相談室」を連載されていましたが知名度は低いものと思っていたのです。裏話ですが講演費の話のとき、氏も「講演会を依頼されたのは初めてなので相場がわからない。交通費+αでいい」とおっしゃっていました。それが工学部8号館の大講義室で立ち見が出るほどの人気でうれしい誤算でした。筆者は他の企画の準備をしていて聴講できず、悔しい思いをしました。最後に本学出身の藤本義一氏の公開テレビ収録も行われました。

⑥川崎1

第38回白鷺祭 メインステージ(学生会館前)

<友好祭>

1回生の時、船舶工学科は看護短大と合同で模擬店を出しました。その後の付き合いは長く、この看護短大のクラスとテニスサークルを作って、卒業の頃まで活動していたようです。(筆者はテニスをしなかったので詳細は不明)

一方、実行委員会では大学祭実行委員会は友好祭に、友好祭実行委員会は大学祭にお互い自主企画を出していました。そのひとつに献血があり、お互いに献血車を呼んでいました。友好祭のときに献血を呼びかけるテープを作成しました。聖飢魔Ⅱの曲に「か〜べに飛び散るいきちのしぶきが〜あ〜、けんけつしろとさけんでいるのさ〜」という詞をつけて流していたところ、献血センターの方に苦笑いをされました。これとは別に当時流行していた巨大迷路を 1986 年の友好祭で企画しました。資金不足という問題がありましたが、丁度選挙が終わったときに選挙ポスター用のベニア板を無理を言って譲ってもらい、模造紙を貼って壁を作った思い出があります。これがまた、予想を大きく上回る入場者に驚かされました。筆者らはこの年だけのつもりでしたが、我々の考案した企画がいまでも続いていると風の便りに聞きました。15 年も続いていることもまた驚きです。

<実行委員>

第 37〜39 回で大学祭実行委員をさせていただきました。振り返って見ると“筆者の学生生活＝大学祭”といったものでした。実行委員は総勢 30 名程度(友好祭は実行委員が 200 名以上)で4日間の行事を運営していました。実行委員が少ないから魅力ある大学祭ができない、魅力がないから実行委員にならないの悪循環だったと思います。当然課題は、どうすれば府大生に魅力ある大学祭ができるのかということでした。夏休み前からどんな企画を出すのか話し合い、費用の割り振りや参加人数の目標、必要機材の調達などを議論しました。また8月末には合宿と称して朝から晩まで討論していました。前

期試験の頃が企画を煮詰める山となります。本来前期試験前に整理しておけばいいのですが、そこは学生、ついギリギリまで引き伸ばしてしまいます。そして試験が終わると立看板を描いたり、企画に使うものを調達したりで大忙しでした。泊まり込みでくだらないことを話しながら学生会館で立看板を描いたり、狂気の様相で企画用のBGMを作ったりしたのはいい思い出です。本番中は連日泊まり込みで食事をする間もないくらい動き回っていました。でもそれが苦にならなかったのはお祭り人間だったからでしょう。終わったときの充実感と脱力感になんともいえない感動がありました。

⑦川崎2

<終わりに>

思いつくままに書かせていただきました。いまでも実行委員だった仲間とは時々会って、当時の話をしています。仲間に恵まれたからずっと大学祭に携わってこれたものと信じています。今回、久しぶりに学生時代を振り返ることができ、何の得にもならないことに一生懸命になれた頃を懐かしく思い出することができました。執筆の機会を与えてくださった関係者の方に感謝します。



友好祭紹介

小池 祐輔(現4回生)

友好祭【通称:友祭(ゆうさい)】は、大阪府立大学・大阪女子大学・大阪府立看護大学及び同医療技術短期大学の府立系4大学が力を合わせて作り上げている学園祭で、毎年5月末頃に行われています。新入生にとっては、入学後初めて体験する学園祭なので、大学の自由な雰囲気と楽しさにさぞ驚くことでしょう。その歴史は長く、すでに41回を数えています。では、なぜ府立系4大学が協力し合って1つの学園祭を作っているのでしょうか？その答えは、昔々1962年のこと、府立系大学・府立系専門学校に重大な問題が起きた時にまで遡ります。その問題とは、突然の学費値上げです。各大学の学生は困ってしまいました。そこで、府立系4大学と一緒に協力し合って、この問題に立ち向かおうと考えました。一緒に協力し合うためには、まず仲良くならなないと・・・と、ゆーことで、府立系4大学の友好を深めるために、友好祭が作り上げられたのです。

それでは、具体的に友好祭の中身を見ていきたいと思えます。突然ですが、ここで筆者の独断と偏見で選んだ友好祭の見どころ&楽しみどころBest3です。

1位:約100店舗もの模擬店

2位:体力測定

3位:プロのアーティストによるコンサート

まず、3位の「プロのアーティストによるコンサート」についてですが、毎年ビッグアーティストによるコンサートが総合情報センターUホール白鷺で開催されます。過去には、〇〇〇や〇〇〇さんなどが来ました。コンサートチケットは通常価格の

6~7割程度で販売され、テレビの中の人をかなり近くで見ることができるので、毎年チケット発売日には徹夜組が出るほどの大盛況です！

次に、2位の「体力測定」についてですが、これは看護大学の学生さんにより行われます。その内容は、身長・体重測定に始まり、肺活量や平衡感覚の測定、アルコールパッチテストなども行われ、自分の体力の隅々まで知ることができます。日頃運動していないと、かなりショックを受ける結果となってしまいます・・・

最後に、1位の「約100店舗もの模擬店」についてですが、定番のたこ焼き屋に始まり、インド料理のナンや信州名物おやき屋さんといった、学園祭らしい個性あふれるお店も数多く出展されます。そして、何と言っても一番嬉しいのが、他大学の学生と協力して模擬店を出すということです。普段はなかなか接する機会の少ない、近くて遠い大学生同士の出会いとふれあいの場になる訳です。来場者にとっては、どの模擬店の料理を食べるのか選ぶ楽しみ、出展者にとっては、いかにして売上を伸ばすのか考え、工夫し他大学の学生と協力して頑張る楽しみがあるのです。

その他にも、学内に設置された10m×6m程のステージ上で繰り広げられる企画や、ダンスパーティーなどでも楽しむことができます。

ここまで、ざっと紹介してきた友好祭ですが、次の第42回友好祭は5月末頃、大阪女子大学にて開催されます。皆さん行ってみたいはいかがでしょうか！？とても楽しいですよ！

雨男の結果は？—第27回七夕祭の紹介—

中塚 智也(現4回生)

早いもので大学に入学してから4年が経とうとしている。今回、いきなり同窓会誌に大学祭関係で何か記事を書く事を依頼されたが、4年間で振り返るいい機会だと考え、承諾した。海洋とは全く関係ない話になるが、ご了承願いたい。

私は大学生活で大学以外での行動というか活動は社会人リーグでサッカーをしていたのと、大阪出身のこともあり、たまに高校の仲間で旅行に行ったりスキーをしにいったりしたぐらいで、その他は大学で活動することが多かった。5月に行われている大阪女子大学、大阪府立看護大学、同医療技術短期大学部合同の友好祭や秋の白鷺祭では実行委員ではなかったもので、模擬店を出店したりステージ上で劇や企画を行ったりしたものだが、それについて書くと先輩方に対する最近の大学祭の紹介にならないのでここでは自分が実行委員として参加した七夕祭について書こうと思う。

⑧中塚1

七夕祭と聞いてピンとこない人も多いと思うが、これは名前のとおり七夕前後に一日だけ、5コマの講義が終了してから21時ぐらいまで毎年行われているもので、今年度で29回を数えた。前述の二つの大学祭に比べれば歴史の浅いお祭りである。内容は例年それほど変更なく、彦星・織姫コンテストというミスコン?のような企画と応援団による6公立大学対抗戦の結団式、堺市のおばちゃん達と一緒に踊る盆踊りが行われている。場所は学生会館と経済学部一号館の間のでっかい木の周辺で、模擬店も20ぐらい出る。これを行うもとの目的の一つに府大周辺に住んでいる人達との交流というのがあり、それに基づいて大学周辺の住宅地や商店などに宣伝に行くため当日は近所のガキや奥様方でなかなかのにぎわいを見せている。しかし、夏休みと体育会の6公立大学対抗戦の直前ということもあり、学生はそれほど来てくれない。結団式は応援団が単独でがんばっている。と言っても、会場が狭いこともあり、当日学生会館前は人で埋め尽くされる。

と、概要としては以上のような感じである。私は26回と27回の2回、実行委員として参加し、27回の際は副委員長だった。その時のエピソードをお話しよう。

4月のある日、私はある農学部の知り合いの先輩(26回の時副委員長)に呼び出され、27回の副委員長をやらないかと誘われた。特に断る理由もなかったし、26回に参加しておもしろかったので O.K.した。それに、やりたいこともあった。学生の参加を増やすことと、子供向けの企画を作ることだ。学生の参加が少ない割にステージでは学生向けのコンテストや結団式しか行っておらず、せっかく遊びに来た子供たち向けの企画が無かった。また、学生の参加が増えればもっと盛り上がると思っていたのだ。特に、学生の参加は努力すればすぐに増え

る自信があった。それは七夕祭自体に対する自信でもあるが、七夕祭は参加すると非常におもしろいのだ。会場に来てくれた人には無料でお酒が振舞われるし、電飾はなかなか綺麗だし、学生向けのテンポの速い盆踊りは無性に楽しい。酒を飲んで踊るのは最高だ。と、言う訳で、私は例年の良さは残しながら、また、めんどろな雑務は無言の内に委員長ともう一人の副委員長になかば押し付け、その二つを達成するために動き出した。

まず始めに子供向けの企画として「おぼけ屋敷」(正確には学生会館内の一室で行われたのでおぼけ部屋なのだが)を企画した。定番だが、工夫次第でいくらでもおもしろくなるところと、その年の実行委員の数が多かったので、大人数で準備できる企画として押し通した。当初、七夕と関係ないし、会場が二分化するとして反対する委員も多かった(んじゃ、結団式や盆踊りは七夕に関係あるのか!と内心思っていた)が、参加者がお化け屋敷をただ通過するだけじゃなく、お化け屋敷の中から短冊を探し出し、願い事を書いてもらおうという企画性を持たせ、それを外の笹にくくりつけてもらおうという案を考え、反対意見を消し去り、なんとか委員会内部にお化け屋敷部を設立することに成功した。

次に、学生への呼び水として、学生会館周辺にちょうちんをぶら提げること考えた。これまた夏祭りには定番だが、子供心にふらふらと学生が集まるような気がしていた。これにも幾つかの問題があった。まず第一にお金がかかること、電球を使用するため、電源を確保しないといけないこと、もし何かの拍子に電球が壊れ破片が飛び散るとけが人が出るかもしれないということだ。お金の問題は私が会計係だったこともあり早々と解決し、電源の確保もある程度ならなんとかかなりそうだった。しかし、最後の問題はなかなか解決策が思い浮かばなかった。なぜなら、私自身子供の頃にちょうちんに石を当てたり、棒で叩いたりして遊んでいたのが、絶対に安全だと主張する自信がなかったのだ。結局当初の思い通りに学生会館周辺にぶら提げることとはできず、見張りを立てている一部の場所での使用というものになってしまった。私としては当日昼

間からちょうちんを学生会館周辺にぶら提げることによる宣伝効果を狙っていたのだが、目立たないものになってしまった。当時もう少し時間と労力があれば可能だったのではないかと今でも悔やまれる。

そうこうしている内に七夕祭当日になった。始まってみるとお化け屋敷は行列ができるほどの盛況ぶり、お化け屋敷の中から聞こえる悲鳴や泣き声を聞きながら子供だけでなく、学生も楽しそうに並んでいた。ちょうちんも小規模ではあったが夏祭りの雰囲気を出していた。その結果に自分でも満足していた。

⑨中塚2

しかし、始まって一時間ちょっと過ぎた時、突然大雨になった。さらには雷までやって来た。こっちは撤収や避難におおわらわ。第27回七夕祭は無残にも途中で中止になってしまった。

そのため色々な方面(模擬店を出店してくれた方々や先輩方など)から「雨男」として非難された。確かに模擬店の材料は無駄になってしまっただろうし、七夕祭を楽しみにしていた人には申し訳と思う。しかし、3ヶ月近くもこの日のために色々準備してきたのに結果を出せずに中止になってしまいショックなのはこっちだと思っていた。そんな時、1回生の時に飲み会で池田教授が言っていたこんな言葉を思い出した。「結果を出せないような奴は死んでしまえ!」なるほど。私はその時死ぬべきだったのか。それでは、今度こそ死ななくてもいいように、この原稿をこの辺で終え、実験の準備でも始めるとしよう。



白鷺祭紹介

小池 祐輔(現4回生)

白鷺祭【通称:鷺祭(さぎさい)】は、毎年11月初め頃に行われている学園祭です。友好祭と大きく違う点は、大阪府立大学の学生のみで作られているというところです。その歴史は友好祭よりも長く、すでに53回を数えています。開催規模は4大学合同で行われる友好祭よりも小さいですが、その分だけ府大生の活躍の場が多く、また地域住民の方々の多数の参加があり、地域密着型の学園祭となっているのが最大の特徴です。

それでは、具体的に白鷺祭の中身を見ていきたいと思えます。突然ですが、ここで筆者の独断と偏見で選んだ白鷺祭の見どころ&楽しみどころBest3です。

1位:課外活動&各研究紹介

2位:フリーマーケット

3位:プロのアーティストによるコンサート

まず、3位の「プロのアーティストによるコンサート」についてですが、友好祭同様毎年ビッグアーティストによるコンサートが総合情報センターUホール白鷺で開催されます。過去には、サザンオールスターズも来たそうです。ちなみに去年は吉本若手芸人(ビッグアーティスト?)が来たのですが、その人気は凄まじく、チケット発売日には約200人の行列ができ、チケットは即日完売でした。

次に、2位の「フリーマーケット」についてですが、これは地域住民の多数の参加希望があり、毎年抽選になるほどの盛況ぶりです。生活雑貨からぬいぐるみなど非常にバリエーションに富んだ商品が破格の値段で売られているので、会場は多数の来場者でごった返しています。

最後に、1位の「課外活動&各研究の紹介」についてです

が、何と言ってもこれが白鷺祭最大の目玉です。課外活動紹介では、体育会系や文化部系の学生による活動紹介が行われます。学生が、勉強だけでなく(もしかしたら、勉強以上に...)日頃、力を注いでいる成果を示す場となっています。

そして、各研究紹介(企画名:OPEN LABO)では各学部・学科の研究が紹介され、府大を志望する高校生や家族連れ、地域住民の方々などの多数の見学があります。ちなみに、海洋システム工学科では、「バルブ周り流れの可視化実験」などを行いました。

その他にも、ステージ企画や、模擬店などでも楽しむことができます。

⑩小池

ここまで、ざっと紹介してきた白鷺祭ですが、次の第54回友好祭は11月初め頃開催される予定です。皆さん行ってみたいかがでしょうか! ?とても楽しいですよ!

…大学祭の思い出…

古水 就也(現4回生)

あれは1回生のときの友好祭だった。友好祭実行委員のくじ引きにより、看護大と共同で模擬店を出すことになった。男ばかりの工学部にあって、これはうれしいことだと思ったことは今でも記憶に新しい。模擬店を開くにあたって交渉役として、僕とC君が選ばれた。というより誰もする人がいなかったから…である。

一度、天王寺で話し合いをただけであったが、当日はなかなかうまくいったように思う。3日目だったか、最終日に打ち上げでもとおもいきや周りはそのようなムードではなかった。少し後からだが、「海洋の人きしよい(気持ち悪い)！」と言われていたらしい。なんでも最終日とある2名が携帯の番号を聞きまくった…なんて噂がある。

とはいえ、大学生活のいい思い出となった。

①古水

白鷺祭記

桂樹哲雄(大学 期)

降臨

どわははは。信者の皆、元気かな？ 軽音楽部所属の桂樹である。よろしく。先日我輩は、かの偉大なるバンド聖飢魔Ⅱの宣狂師(自称)として布教活動を行なう聖液待なる5人集団の一員として、ここ大阪府立大学に降臨した。これからそのときの様子をほんの少しだけ皆に伝えておこうと思う。

時は2002年11月3日巳の刻、我々は小雨降るなかもずキャンパスに到着する。今回の会場は経済1号館と呼ばれる古ぼけた建物の1階、第一教室。ミサのために装飾が施されたその部屋には、いつのまにか冷房が取り付けられている。ミサの開始は未の刻なので、時間はたっぷりある。我々を用意された別の部屋で正装をし、しばしの瞑想にふける。

未の刻、ついにミサが始まる。集まった信者達の反応も上々だ。オープニングは"創世記"。ツインギターの美しいこの曲はミサの幕開けにはもってこいだ。vocalの鋭いシャウトに続いて"鬼"。スローテンポの曲に新たな信者がうまれそうな予感を抱きつつ、次は"Guns and Butter"。

途中のタッピングを交えたギターソロに信者達が沸く。この曲の持つ疾走感に皆の心も一つになり、続く有名曲"ロウ人形の館"で興奮は早くも最高潮を迎える。残された曲もあと一曲。最後に名曲"The End of the Century"が放たれる。聖飢魔Ⅱの代表曲ともいえるこの曲で、ベースがとどろき、ボーカルが吠える。中間部では2本のギターが火花を散らし闇を切り裂く。そして壮大なエンディングとともに曲は終わり、今回のミサは幕を下ろす。あまりの大歓声に名残惜しさを抱きつつ、我々は祭壇を降りた…。

⑫桂樹

写真は、ミサのあと記念にキャンパスを散策した際に撮影した貴重な一枚だ。ミサの最中の写真は残念ながら手元がないので、これで我慢してほしい。後ろに写っているのは懐かしい学生会館だ。その前には我々5人と通りすがりの生贄たち。ミサでの祈りが通じたのか雨もやみ、まばゆいばかりの光が我々を包んでいる。各メンバーの担当楽器は左から guitar, guitar, bass, drums, vocalだ。ちなみに我輩は右から二番目である。ひとつ付け加えておくと、一番左の彼は正装が間に合わず妙な表情になっている。体調が悪かったわけではない。我々はいたって元気である。

さて、そろそろ行かねばならない。次の世紀末に会おう。さらばだ。どわははは。

大阪府大学改革基本計画の概要

片山 徹(大学 41 期)

現在、府大学では、少子化の進展、大学間競争の激化、行政改革の推進など大学を取り巻く社会経済情勢の変化に対応するために、改革が進められています。改革の柱の一つは、大阪府立大学、大阪女子大学、府立看護大学の三大学を一つの大学に再編・統合することです。もう一つの柱は、法人化です。

今回は、府によって平成 14 年 12 月 20 日に策定された「大阪府大学改革基本計画」

(<http://www.pref.osaka.jp/fu-daigaku/keikaku/>)

について、次ページにその概要を示した図を紹介します。

この基本計画案は、21 世紀にふさわしい府大学の改革を進めるために大阪府が集めた外部有識者によって設置された「府大学のあり方検討会議」の最終報告(平成 14 年 2 月)を受けて、府大学の学長らの意見を聴取、パブリックコメントの手続き等を経て策定されたもので、この中で府大学の目指すものは、大学院を重視した高度な「研究型」大学としての発展、自律した大学運営と記されています。しかしながら、その詳細な内容については、府民および学内から意見

(<http://www.pref.osaka.jp/fu-daigaku/public/>)

を十分に反映したものではないとの意見もあります。

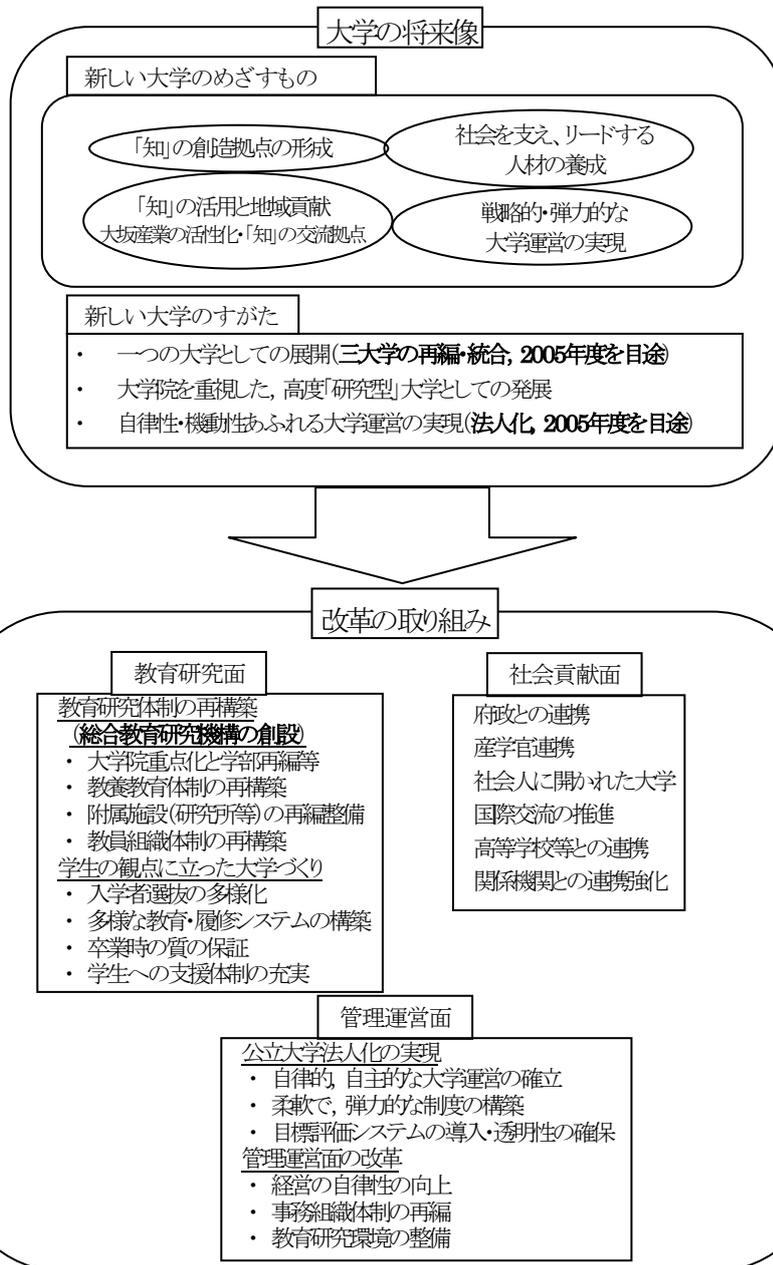
自動車社会と親の責任について

永井 順一(元教員)

近年、車社会での交通事故が、年々多発の一途を辿っている。

学生が起こす交通事故も増大している。その理由の一因は、子供のときからの交通安全教育の不足であるように思われる。如何がでしょうか、我が国の車社会全体にも問題が多い。今一度、家庭や社会基盤の充実に自覚の高揚を図ることが、古くて新しい問題として浮かび上がって来ると考える。

特に、事故を起こせば学生達にとって、一生苦重となりまた親への重圧は大変で人生崩壊にもなる。心理学的に考えて見れば、自分の子供の性格的特性についての背景をも親として良く知っておくべきで、親や教師への反抗的態度、事故は両親を罰するための一種の自殺行為、攻撃性性格は幼児期より出現し社会適応が悪いことで有る。以上、自己反省をしながら、良き道標としたい。



日時:2002年12月13日(金)18:00~20:40

場所:たかつガーデン

出席者:増田会長(大10), 定兼副会長(大15), 奥野副会長(大17), 田口(造3), 田中(造3), 保田(造3), 千種(造4), 片岡(大2), 金田(大5), 山岡(大7), 大野(大8), 城野(大8), 松岡(大9), 小幡(大12), 杉山(大12), 出口(大12), 吉久(大13), 西田(大17), 池田(大21), 池田(大35), 大塚(大35), 有馬(大37), 山田(大37), 坪郷(大39), 片山(大41), 中谷(大45), 大船(大50), 鈴木(大50), 前川(事務局)

以上29名(敬称略)

会長挨拶:増田会長より挨拶があった。

議長選出:定兼副会長が議長に選出された。

議事:

(1)報告事項

a)平成14年度会計中間報告

山田会計担当理事より資料に基づいて平成14年度会計の中間報告がなされた。

- ・ニューズレターの発行が1回になったため、予算よりも14万円程度支出が少なくなる見込みであることが報告された。
- ・会費納入率の推移より、ニューズレターの発行が会費納入率の向上に寄与していると考えられることが説明された。

b)編集委員会報告

- ・坪郷編集担当理事より資料に基づいて編集委員会の活動報告がなされた。
- ・『鷗朋』や『ニューズレター』の発行時期が会計年度に影響することから、『鷗朋』第4号の発行を年度末にならないよう編集委員会へ申し入れることになった。
- ・坪郷編集担当理事より理事各位に対して『鷗朋』・『ニューズレター』への投稿依頼があった。

c)工学部再編について

- ・池田学内理事より大阪府立大学の改革と工学部・工学研究科の再編について、資料に基づいて現状報告がなされた。
- ・同窓会会員も大学の将来については大変高い関心を持っているので、『鷗朋』やニューズレターで情報を流して欲しいという意見が出された。
- ・奥野副会長より、これまでは報告を出せる段階に至ってはいなかったが、これからは『鷗朋』等でできるだけ報告していく意向であることが説明された。

(2)協議事項

a)平成15年度会計予算案に関する件

- ・山田会計担当理事より資料に基づいて平成15年度会計の計画案が説明された。
- 資料を一部修正の上、平成15年度会計予算案が承認された。

以上

事務局通信

今号より、事務局のコーナーを頂きました。お目汚しですが、少々お付き合いのほどよろしく願いいたします。今号の特集テーマは「祭」ということで、百舌鳥八幡宮の神事や、大学祭についての記事を執筆いただきました。

平成 15 年度会計予算案

(H.15.4.1-H.16.3.31 単位:円)

収入の部		支出の部	
前期繰越	1,248,278	振込手数料	56,000
同窓会会費	1,600,000	通信費	400,000
理事会会費	25,000	役員費	677,200
		会議費	110,000
		事務費	60,000
		印刷費	380,000
		備品費	0
		雑費	3,000
		予備費	0
小計	1,625,000	小計	1,686,200
		次期繰越	1,187,078
合計	2,873,278	合計	2,873,278

**平成 14 年度分
会費納入のお願い**

同窓会費をまだお送りいただいていない方はできるだけ早く同封の振込用紙にて納入下さいますようお願い申し上げます。(平成 15 年 2 月末日現在で未納の方には、請求書を同封しておりますのでご確認下さい。)

毎回催促がましくご請求申し上げ誠に苦しいのですが、何分本会は皆様方からの会費のみで運営いたしております。なにとぞ御協力のほどよろしくお願い申し上げます。

「鴉朋」第 5 号への原稿募集・・・ご自由なテーマでお書きください！

- ・仕事や趣味について、大学時代の思い出等、テーマは問いません。
- ・原稿は、郵便(原稿用紙やフロッピーディスク)、ファックス、電子メールなどでお送りください。
- ・分量については、柔軟に対応します。写真やイラストつきの原稿も大歓迎です！

締めきり: 平成 15 年 6 月 30 日(金)

宛 先: 〒599-8531 堺市学園町 1-1 大阪府立大学工学部
海洋システム工学科気付 鴉朋会事務局

TEL/FAX: 072-254-9914

E-mail: doso@marine.osakafu-u.ac.jp

**「鴉朋」編集ボランティアを
募集しています！**

原稿テーマの企画など、より良く、楽しい「鴉朋」にするために、あなたの力をお貸し下さい！

ご協力頂ける方がおられましたら、自薦他薦問わず、鴉朋会事務局までご一報を・・・